



新撰

俳諧七部集

一

中村俊定文庫

文庫 18

854

1



皇都書肆

芭蕉翁著 懷玉堂藏版

新撰俳諧七部集

あきあき 三月月日記 鞆田こまの仙六の系
續室敷みちまの室 白砂入集 附録



序

能借り新古今風体の若くあつて
芭蕉翁のついでにそのそまゝに
目下へんぬ鬼神をもあはれとお
りつせまきものぬのんをもたうく
さするといふ風推のまゝとあると
あはれりあはれに先作蕉翁七篇の選
書あり好聲玉を法らねて一毛のき



すれく実下り 毫鑑とたるるしき
事あり 志をよみこせ成りて
は門は入 鑑として 予撰とあれり
新撰七部集といふ

天保戊戌歲仲夏

別座 繪



康の生平はたふとふたふたの記を
事行の目と爲すかき持りて
子屋の付の事と爲す事
かき持りて記す事と爲す事
御と記す事と爲す事
かき持りて記す事と爲す事
かき持りて記す事と爲す事
かき持りて記す事と爲す事
かき持りて記す事と爲す事
かき持りて記す事と爲す事

とてはしやかほろふ仙路も是れは
うし十有八の事なくまはるの言
そとをそぬ葉門人乃勝もあつて
伊賀の山もあつはさくすまはる

子冊

芭蕉

芭蕉のやち敷と山道のあま

しやうの曲はねふれは葉集の 子冊

柳のやち敷はまのあまの 杉風

あまのあまのあまのあまの 桃鄰

かゝるあまのあまのあまの 八景

指板のうけてりあまのあまの 蕉

佐々木のあまのあまのあまの 冊

あまのあまのあまのあまの 風

ウ

二

風の音はすもよみかき返れ
 隣の桑葉の音はさか
 高きゆり葉とゆり葉の音
 風の音はさかき返れ
 隣の桑葉の音はさか
 高きゆり葉とゆり葉の音
 風の音はさかき返れ
 隣の桑葉の音はさか

名

風の音はすもよみかき返れ
 隣の桑葉の音はさか
 高きゆり葉とゆり葉の音
 風の音はさかき返れ
 隣の桑葉の音はさか
 高きゆり葉とゆり葉の音
 風の音はさかき返れ
 隣の桑葉の音はさか

取立てしと年々鳴るゝの冊

しる書やいほきまのまの風

葉葉のまのまの海に

のりくまのくまの物り

のりくまのくまの物り

のりくまのくまの物り

のりくまのくまの物り

のりくまのくまの物り

のりくまのくまの物り

小舟のまのまの山吹 筆

桃鄰

取阿もてりつとるんや鶴の葉

何々田植のまのまの葉 杉風

高下とつちのまのまの葉 子珊

仲細葉のまのまの葉 李里

木降物新とる海流のまのまの葉 八桑

昭々たるは赤の苔の系
 子祐
 仕立は藤井上ヶ原の壘
 太夫
 一里半ありて海見さや海
 龜水
 獲癖はまゝに痛む言はれり
 楚舟
 窟は所(小)の系は色
 珊
 昔は五輪の系は控廻上
 風
 唯志の海に姫布し事
 鄰
 有明の海は果はさなり
 里
 池田伊丹の城はむむり
 大

沙々たるは川に船は壘
 祐
 てしきりては田のこり
 桑
 志は是茶ふ果は壘古島
 水
 孫は控はさきも控はも
 舟
 十五日前より控はさきり
 大
 てしんて小船のさきも
 里
 城は控は控は町海はも
 舟
 極は控ははははははは
 祐
 お付はさきりも言はれり
 鄰

かしらぬ日と共なる利を風
 ころもや無ゆきのさるるも羅珊
 隣の船も端を借らあふ水
 麻島松枝まうくまうはつて桑
 船きりうりと流し森有る大
 桑葉子甚だ精白乃者社
 一口前子後身も編か野舟
 こ三日東もあつてまももは風
 海ももつはは中遊もも珊

猫の子は正目下は望みして里
 しくれく善くここのは衣法鄰
 是蓮乳母の男も心身は五桑
 望みぬもみちら白く水

八桑

ころ舟の肌をせうらりも有る由
 九はのみやうもは片持の事友 楚舟
 葉乃とまもやうもは片持の事友 楚舟
 葉乃とまもやうもは片持の事友 楚舟

戸板之船波母を多夕新 子冊
 有乃乃船子もきて速く渡る様 杉風
 こころの細く麻を遊ぶやう 亀水
 編の香木熱かりておす持ス 李里
 傳ひたしとらるる松平なり 太夫
 うらみまのひく海をまのの上 子祐
 おくまへくお法乃種傳 桑
 けー織ちちひくお利はて 舟
 山の屋裏へ海留りりり利 鄰

六の月一日ゆめはく由船を 冊
 こころのまをくお新くや洞 風
 ち年うらまのちるまとかんまき 水
 つは雲の道はつらりの様 里
 月の影をぬくすきくむのまを 大
 おはけく時ふと様うきかえ 祐
 雑子鳴せりあまこけくまらふ 桑
 船又乃三船子小く八百 舟
 両角を押しとらるる前巻 鄰

前句の形を定むるなり
 物もりの物を苦みせぬまつき
 之を接投しゆる後行のま
 村もはまの海にまぬるまを
 冬もく葉もく海舟の孫は
 安の目もを投し海舟は
 今もまぬる海舟の下回
 世の中はまぬるまをくまぬる
 之もくまぬるまをくまぬる

冊 風 水 里 大 祐 桑 舟 鄰

よも靴とく後木くまぬるま
 日の指新し鴨おまぬる
 之は海舟もくまぬるまの先
 鼻もくまぬるまをくまぬる
 後もくまぬるまをくまぬる
 菊もくまぬるまをくまぬる

水 風 大 里 冊 祐

贈去種芭蕉菴

子冊

晩鐘を思ふと秋の暮を思ふ

白乃跡はく庭の暮を思ふ 杉風

さも盡はるる秋の暮を思ふ 全

ささけし秋の暮を思ふ 全 珊

炭俵背負ふと下を思ふ乃乃狭 全

潤みあはれとすの海を思ふ 風

此寺の味塩の仕立を思ふ切々 珊

なまかなふと秋の暮を思ふ 風

赤藁の暮を思ふ立定かたあはれ 珊

二重の代乃ゆかたは思ふ 風

都や市乃北園を思ふ 珊

毎年の暮を思ふ 風

月東新片を思ふ 珊

かきつと秋の暮を思ふ 風

面影の暮を思ふ 珊

文々ち秋の暮を思ふ 風

あんなりと鳥居を思ふ 珊

名

醫者のまぬりもみす風
 貝形をたてて年々波のまじりく
 名貴同つてちま鴨もて
 金佛のたね乃後才さく水形
 ちまもほきにあまの戸
 蒜とちまはやくはやく
 赤丸のまじりかかち
 振る明日のまじりかかち
 河はぬまのまじりかかち

川後り投り身をたてて
 けさあつてやくの麻
 片地まの束社と接して
 才小まはらまじりかかち
 大袖のまじりかかち
 ちまもほきあつてやくの麻
 底寒くちまのまじりかかち
 ちまもほきあつてやくの麻
 ちまもほきあつてやくの麻

糸の思ふや五か来入波 風

採茶巻月興

滄波

中明也給まゝに暮老の猶

落乃を後茶かまゝくく風

杉風

賣らぬ粟の阿まのせいまをて

りまのくく後鞠やまの波

全

くち後きやうや松の太高智和ま 全

外と涼しく糸通は波 風

赤まらまは作まゝと流へ 全

森由はしく持おてくまの 波

培まのや豆身の料理はまの 全

徳のまをくくまの風 風

いらはくくまの風はくくのまの 全

鐘を流くくまの波 波

種のある羅子籠をり揚る 全

具足槌とて半乃又物波
 公通之扇下も古たなやゆの花風
 于船の上もはるもの波海を
 舟歌と刺つたてし海客の音全
 舟物とて出入る年子舟中風

野梅鄰新墨自画と綴



芭蕉花圖 二胡字之



さうしぬあはれはくんのさる客 芭蕉
 田植すゝもあつたやもるう角田 其角
 舟のこゝや思ふお勤のこゝへ 嵐雪
 麻のこゝりあゝもるう者や山田 桃鄰

郭

挑灯のこゝり手籠はくまは 杉風
 時を待たぬはゆや小籠も 子珊
 新田や障子どくこゆは 八桑
 明きあゝる窓ももるう郭 澹波

此の如くは此の如くは此の如くは此の如くは
桃鄰

卯の巻

卯の巻乃田屋也菴は華也夜子冊

卯乃巻乃言の如くは此の如くは
桃鄰

卯乃巻乃言の如くは此の如くは
八桑

卯乃巻乃言の如くは此の如くは
楚舟

卯乃巻乃言の如くは此の如くは
杉風

卯乃巻乃言の如くは此の如くは
今

卯乃巻乃言の如くは此の如くは
今

牡丹

牡丹の如くは此の如くは此の如くは
桃鄰

牡丹の如くは此の如くは此の如くは
子冊

牡丹の如くは此の如くは此の如くは
澹波

牡丹

牡丹の如くは此の如くは此の如くは
八桑

牡丹の如くは此の如くは此の如くは
子冊

牡丹の如くは此の如くは此の如くは
桃鄰

牡丹の如くは此の如くは此の如くは
杉風

御月節の興行

花の露に朝の光の影
子冊

散花の御節の葉也
全

足下はこころを
李里

一歩の蝶も
楚所

楚所

立見のあやも
桃鄰

夜もあやも
白之

昔の交は
李里

片折のあやも
子冊

水鏡

今もあやも
楚所

子冊

今もあやも
桃鄰

今もあやも
全

今もあやも
全

今もあやも
子冊

今もあやも
八采

深川

菴の酒を数飲して心は自適なり 楚舟

ふふ

のちをばはしむへ中い思ひぬ 呂國
夕立乃涼くを思ふら回らぬ 子祐
松よりもや鴈返ぬお寺の門 筆水
ふゆい思ふ相のよし重強し 楚舟

瞿曇

拙子乃拙は生けり一筆の本 子祐

拙子乃拙は生けり一筆の本 白々

風を吹

寸法師のあまの袖に心を寄る 杉風

雨を吹

飛ぶのふゆ乃ちをとり思ふ 今

昔のの拙子乃ちを思ふ 蘆水

東鏡はけい思ふくを思ふ 子珊

去らぬ思ふを井底に思ふ 盧程

蓮

耐火豆毛らんに濁りまゝ田んぼ
 楚舟
 閑花替りて縁也しきららるる
 子冊
 けさの縁たしきまゝ田んぼ
 杉風
 ぬきぬきやまき斗のけりおき
 今
 赤のうらや涼繩を垂し
 李里
 幅幅のうらやまきたしき
 杉鄰

船名

五月のや系鞋の結送りひ縄
 濁子

高き乃古郷やてくまき時か
 杉風
 組まてり編りおき包めまき
 子冊
 けりおき縁也しきまゝ田んぼ
 杉鄰
 岩山の右うらやまきたしき
 八桑
 寒きまじりまきしきまゝ田んぼ
 野坡
 葉もまじりまきしきまゝ田んぼ
 利牛
 一筋目まきしきまゝ田んぼ
 出水
 五月のや一筋目まきしき
 夕葉
 新茶おきしきまきの魚子に
 落波

送る酒も一付改屋して一流り 利合
 片四丁半の子續く日永氏 太夫
 ちよとちよと人のちよとちよとちよと 筆水
 舟のそと船押のちよと時うね 子祐
 かきとちよとちよとちよとちよとちよと 桃川
 一付と樽はちよとちよとちよと 杏村
 月と送るちよと日信也 一里塚 李下
 幸や幸なをちよとちよとちよとちよと 李里
 鳴蝉と汗乃入るちよと 茶相山 風弦

名残る櫓の花をまはれ眩曲り 楚舟

弟想送る

姉はちよとちよとちよとちよとちよと 曾良

海川のちよとちよとちよとちよとちよと

ちよとちよとちよとちよとちよとちよと

ちよとちよとちよとちよとちよとちよと

ちよとちよとちよとちよとちよとちよと

ちよとちよとちよとちよとちよとちよと

ちよとちよとちよとちよとちよとちよと

Handwritten text in cursive script, likely a list or account. The text is written vertically on the left page of an open notebook. It appears to be a list of items or a record of transactions, possibly related to a business or a collection of goods. The script is dense and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in cursive script, continuing from the previous page. The text is written vertically on the right page of an open notebook. It appears to be a list of items or a record of transactions, possibly related to a business or a collection of goods. The script is dense and difficult to decipher without a key.

かゝる御事申すに御事なれば
かゝる御事なれば御事なれば
かゝる御事なれば御事なれば

卯のさかしく御事なれば
乃佳句に御事なれば御事なれば
御事なれば御事なれば御事なれば
御事なれば御事なれば御事なれば
御事なれば御事なれば御事なれば
御事なれば御事なれば御事なれば

かゝる御事申すに御事なれば
かゝる御事申すに御事なれば
かゝる御事申すに御事なれば
かゝる御事申すに御事なれば
かゝる御事申すに御事なれば
かゝる御事申すに御事なれば
かゝる御事申すに御事なれば
かゝる御事申すに御事なれば
かゝる御事申すに御事なれば
かゝる御事申すに御事なれば

思ふにこの世の事
も何れも袖をたぢて
来りて思ふに
世の海なるは
思ふに

之録七ノ年仲夏初八日

